

# 乳児に対する“かかわり”における母親の主観性 —乳児の発達的变化と母親の主観性の質的变化に着目して—

名古屋大学大学院 日本学術振興会 上 嶋 菜 摘

## Mothers' Subjectivity in Interacting with the Infants ; Relation with Infant's Mental Development

Nagoya University, Research Fellow of Japan Society for the Promotion of science

UESHIMA, Natsumi

### 要 約

母親が乳児とかかわるときに、かかわりに関与する母親の主観性の内容がどのように変化するかについて、乳児期の子どもを育てる母親を対象に検討を行った。生後1年目の月齢3ヶ月から、6ヶ月、9ヶ月、12ヶ月の時点で縦断的調査を行い、母親が自身のかかわりを決めた際にどのようなものが関係していたのかについて、面接調査を行った。母親がかかわりを決めた理由として語られた内容について、子どもに関する内容である「乳児の心的状態」、母親自身の主観性の中から「乳児の心的状態への働きかけ」と「母親自身の感情」の3カテゴリーへの該当の有無を検討した。その結果、9ヶ月の時点以降では、乳児の心的状態に対して影響を与える意図を含んだ内容である「乳児の心的状態への働きかけ」が増加し、母親自身の感情や願望が優位な内容である「母親自身の感情」は減少する傾向がみられた。乳児に対するかかわりに関与する母親の主観性の内容は、乳児の発達とともに変化することが示唆された。

**【キー・ワード】 母親の主観性, 乳児の発達, 母子関係, 縦断研究**

### Abstract

This study examined the changes of the contents of mothers' subjectivity. Mothers were shown some video-clips which included infants in different situations and asked about their responses to each infant when their infants were three, six, nine and twelve months old. From what viewpoints they answered to the question "why you selected a particular response" were assessed by the following three categories: infants' mental states, mothers' intention to regulate infant's emotional states, and mothers' desires or emotions. Results showed that mothers reported more about their intention to regulate infant's emotional states and less doing something to the infant which was less based on infant mental states as the infants get older.

These qualitatively changes of mothers' subjectivity are discussed in relation to infants' mental development.

**【Key words】** mothers' subjectivity, infant's mental development, mother-infant relationship, longitudinal study

## 問 題

核家族化の進行により育児が困難になったといわれるようになって久しく、子育て支援は社会的な課題として認知されている。そして、子育てサークルや支援センターといった社会的支援制度がずいぶん整ってきている。しかし、乳児期早期に子どもを連れて出かけることは現実的には難しく、そのような場にまだ参加することが難しい0歳児については支援が十分とはいえないのが現状である。例えば、乳児健診の場では、0歳児の母親<sup>\*脚注1</sup>から「自分の子どもなのに何を思っているのかわからない」「どのようにかかわったらよいのかわからない」という訴えが多くきかれ、乳児期の子どもとのコミュニケーションの難しさや自信の持てなさがうかがわれる。また、虐待による乳幼児死亡はたびたび報道されており、平成19年1月から20年3月の15ヶ月間での死亡事例は115例142人と、前年度の集計より16人増加していた。そして、そのうち0歳児は5割弱を占めていた(厚生労働省,2009)。このような現状からは、子育ての難しさや親子関係の形成の問題が最悪の結末を迎えている事例が増えていることを指摘できよう。

生後1年目は、親と子が関係を育む大切な時期である一方で、小さな傷つきが積み重なって親子関係の危機にもなりやすい繊細な時期でもある。そのため、子育ての実態把握や母子相互作用の観察といった従来型の研究にとどまらず、子どもとのかかわりについて母親の主観的体験に踏み込んだ研究が必要であると考えられる。そこで本研究では、上述した乳児とのコミュニケーションの難しさや自信の持てなさ、すなわちかかわれなさといった問題に対する臨床的援助を考える。具体的には、母親はまだ言葉を発しない乳児の何をもとにかかわり、乳児に対するかかわりにどのような自身の主観性を関係させているのかに焦点をあてて、子どもの発達にしたがって子どもへのかかわりの様相がどのように変化するのかについて、母親の視点から実証的な検討を行った。

母親が、乳児の何にに応じているのかという問いについて、従来の母子相互作用の研究では母親による子どもの情緒表現への気づきが重要視されてきた。例えば、Emde & Sorce (1988) は、特定の情緒に関する明確なしぐさがない新生児に対しても、文脈をもとにして様々な特異的な情緒を読み取る母親の母性的な応答性は、母子の共感的過程に貢献すると述べている。また近年、愛着理論(Bowlby, 1964)においても、愛着形成において重視される点が、従来の子どもの表出したシグナルに対する母親の感性という行動の側面から、子どもの視点から物事をみる傾向(see things from the child's point of view)という母親の傾向へと捉えなおされるようになってきた(Fonagy & Target, 1997; Meins, 1997; Koren-Karie & Oppenheim, 2002)。このような知見から、母親が乳児にかかわるためには、自身が乳児の思考や欲求、感情といった心的状態(mental state)を感じ取ることの重要性を指摘することができるだろう。

一方で、母親のかかわりは乳児から感じ取った心的状態によって、一義的に決められるものではない。なぜなら、母親が乳児にかかわる際には、母親自身の行動の背後にも動機、意図、感情が働いていると考えられるからである。鯨岡（1986, 1989）は、上記の母親の行動の背後に把握される動機、意図、感情を母親の主観性と呼び、母子相互作用の関与観察者には、子どもの心的状態のありようと同様に母親の主観性も把握されることを指摘している。これらの研究は、関与観察者の視点から母子相互作用の背後にある子どもと母親の主観性について指摘したものであるが、この点について上嶋（2008）は、母親自身の視点から検討を加えている。具体的には、乳幼児を育てている母親を対象に面接調査を行い、母親は9ヶ月児に対する自身のかかわりについて「どのようなところからそのようにかかわったのか」と尋ねて母親が自身のかかわりと関係付けることができている内容について把握を行った。その結果、母親の回答からは、乳児の心的状態、自分自身の主観性のいずれをもが抽出され、母親が自分自身の主観性のありようについても意識できていることが示された。さらに、母親のかかわりを捉える上では、母親に把握された乳児の心的状態だけを検討するのでは不十分であり、母親がどのような自身の主観性を関与させながらかかわっているのかについても検討していくことの必要性も示された。なぜなら、母親が感じ取った乳児の心的状態とかかわりが同様であっても、その背景に喚起された母親の主観性の内容は異なる場合もあるからである。例えば、乳児の心的状態を「楽しんでる」と感じ取って動作を真似て遊ぶというかかわりであっても、「もっと楽しくなるように」と母親が感じ取った乳児の心的状態に対して働きかけるようかかわる場合と、「私も一緒に楽しみたい」という気持ちからかかわる場合では、その背景に喚起された母親の主観性の内容は異なる。また、「楽しんでる」と感じ取って、「ひとりで過ごせる時間も大切だから」、「かわいい。こんなこともできるようになったのねって嬉しくなって」見守るというかかわりも回答されていた。このように、母親の主観性には様々な内容が含まれており、かかわり手である母親は、自身が感じ取った乳児の状態に応じるだけでなく、その都度自らの主観性を関与させながら乳児にかかわっていることを指摘することができる。

それでは、乳児とのかかわりにおいて母親に喚起される主観性は、乳児の発達にもなってどのように変化するのだろうか。生後一年目の乳児の心的状態は、生後間もない時には生理的欲求の表出が主であるが、首が据わる頃には社会的微笑をはじめとして「表情が出てきた」と感じられるようになり、寝返りやお座りといった運動面の発達が見られる頃には、相手へと向けられる行動表出（発声や視線）が明瞭になってくる。さらに、9ヶ月になると関主観性の発達や三項関係の成立で知られるように相手を意識した行動表出が増加し、生後一年が経つ頃には初語や歩行といった面でも幼児の面持ちが意識されるようになる。このような乳児の発達の变化を考慮すると、母親自身が感じ取る乳児の心的状態も子どもの発達とともに変化すると考えられ、母親の主観性にも量的・質的な変化が生じると考えられる。

このような視点を踏まえて、上嶋（2009）ではより月齢の低い乳児を育てている母親を対象に3ヶ月児の映像を素材とした検討を行った。生後4ヶ月児を育てる母親が自身のかかわりと何を関係付けることができているのかを尋ねた結果、①乳児の心的状態は、疑問系で言及されており、乳児の明確な心的状態の把握が回答されなかったこと、②母親が感じ取った乳児の心的状態の変化・調整に働き

かける意図は回答されなかったこと、③母親自身の願望や感情（e.g. 「(私が) 刺激を与えていたいから」、や、育児に関する経験や知識（e.g. 「A (わが子の名前) だったらそのままグズグズ寝るときもあるし」）が回答されていたことが示された。

これまで、このような母親の主観性を、乳児の心的状態の発達との関連で捉えた研究はなく、発達とともに乳児の心的状態が分化し、行動の意図や動機を感じ取りやすくなるにつれて、母親のかかわりに、母親に把握された子どもの状態が影響を及ぼしやすくなるのか、母親の主観性の関与がどのように変化するのかについては明らかになっていない。以上のことを踏まえ、本研究では以下の仮説を検討することを目的とした。

仮説1 乳児の月齢が高くなると、乳児の心的状態を基にした回答が増加する。

仮説2 乳児の月齢が高くなると、乳児の心的状態に働きかける意図が増加する。

仮説3 乳児の月齢が高くなると、母親自身の願望や感情の単独回答は減少する。

## 研究1 乳児の発達にともなう母親の主観性の変化

### 目的

子どもの発達にともなって、母親の主観性の関与のありようがどのように変化していくかについて検討するために、母親が感じ取る【乳児の心的状態】と、母親の自身の主観性の中でも【乳児の心的状態への働きかけ】と【母親の感情】について、面接から得られる回答の頻度と割合を数量的に検討することを目的とした。

### 方法

**研究協力者** 2009年3～5月に小児科クリニックを通じて研究協力者を募集した。第一子の予防接種に訪れた家族に対して、研究目的とプライバシーに関する配慮について個別に説明を行い、8名の母親から同意が得られた。研究目的については、「これから初めて赤ちゃんを育てるお母さん方にとってヒントを教えてもらうため」という趣旨を説明した。研究協力者のうち、子どもの月齢が生後3・4ヵ月時点から12ヵ月までのすべての調査ポイントで協力が得られた5名（男児3名、女児2名の母親）を分析対象とした。途中の時点で調査協力が得られなかった理由は、子どもの体調不良と引越してであった。調査開始時点で、子どもの平均月齢は4.3ヵ月（3～4ヵ月）であった。母親の平均年齢は29.4歳（26～34歳）であった。

**手続き** 子どもの月齢が、3・4・6・9・12ヵ月の時点で個別の調査を行った。月齢それぞれの調査では、3・6・9・12ヵ月児の映っているビデオクリップを提示しながら、半構造化面接を行った。各月齢のビデオクリップには、各月齢の予備調査で乳児の状態が快から不快まで含まれることが確認されている5本を使用した（島・小原・小林・上嶋，2009）。

なお、同様の面接を、母親が育てる子どもとの母子相互作用場面を素材として実施した場合、乳児の心的状態に対する言及がビデオクリップを素材とした場合よりも少ないものの、母親の主観性を捉える上では妥当性が確認されている（上嶋・島，2009）。

**半構造化面接** 面接は、調査協力者の自宅が1名であり、その他は調査依頼を行った小児科併設の保育室で個別に行われた。初めに、乳児が映っている15秒のビデオクリップを提示した。一つ目の質問では、母親に自身のかかわりを決めてもらうために「赤ちゃんがこのような様子するとき、〇〇さんならどのようにかかわりますか」と質問した。続いて二つ目の質問では、母親が自身のかかわりを何と関連付けているのか、どのように体験しているのかを尋ねるために、「そのようにかかわるとするのは、どのようなところからですか」と質問した。二つ目の質問を行う際には、一つ目の回答を繰り返したり、簡単にまとめたりして「同じおもちゃを持ってきて一緒に振るとするのは、どういうところからですか」のように質問した。ビデオクリップは各月齢につき5本が提示された。面接中は、研究協力者の許可を得て録音を行った。面接に要した時間は、約30分から1時間であった。また、面接には、研究協力者が育てる子どもが同席しており、途中で子どもがぐずったときには適宜中断し、母親の判断で面接を再開した。

**分析の単位** すべての面接記録から逐語録を作成した。二つ目の質問に対する回答を分析対象として、上嶋（2008）で作成したカテゴリーを改編<sup>\*脚注2</sup>して使用した。そのうち「乳児」に関する回答である【乳児の心的状態】を、母親の主観性に関する回答である【乳児の心的状態への働きかけ】と【母親自身の感情】の3カテゴリーを採用した。コーディングに使用した各カテゴリーの定義および解答例は表1に示した。二つ目の質問に対する回答が、上記の3カテゴリーのうちどの観点から回答されているのかについて、ビデオクリップごとに該当の有無をカウントした。カテゴリーごとに、該当していた回答の数をそのカテゴリーの得点とした。

表1 コーディングに使用したカテゴリーとその定義および回答例

【カテゴリー】	定義	回答例
乳児の心的状態	乳児の思考・情動・欲求等の心の状態に関する言及	「楽しいそうにしているので」、「興味があるんだな」、「おなかすいた」
乳児の心的状態への働きかけ	乳児の心的状態を調整するような母親自身の意図や動機を含む内容	「もっと楽しくなるかな」、「安心感を与えてあげたい」
母親自身の感情	母親自身の感情や好奇心、願望やコントロール意図を含む内容	「いてもたってもいられない」、「私が触れていたい」、「笑って欲しい」

## 結 果

それぞれの研究協力者の回答のうち、表1の各カテゴリーに該当していた回答数を表2に示した。調査時の月齢ごとの各カテゴリーの割合と出現頻度を図1に表した。

表2 協力者ごとの各カテゴリー該当回答数

協力者のID	乳児の心的状態				乳児の心的状態への働きかけ				母親自身の感情			
	3ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12か月	3ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12か月	3ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12か月
1	3	3	5	3	0	0	1	2	3	2	2	2
2	2	0	4	4	0	1	0	0	2	0	0	0
3	2	1	3	3	2	0	3	2	2	1	1	0
4	2	2	3	2	0	0	1	1	2	1	0	0
5	3	2	3	4	0	0	2	3	2	1	0	0
合計	12	8	18	16	2	1	7	8	11	5	3	2

注釈. 空欄は該当する回答がなかったことを示す。

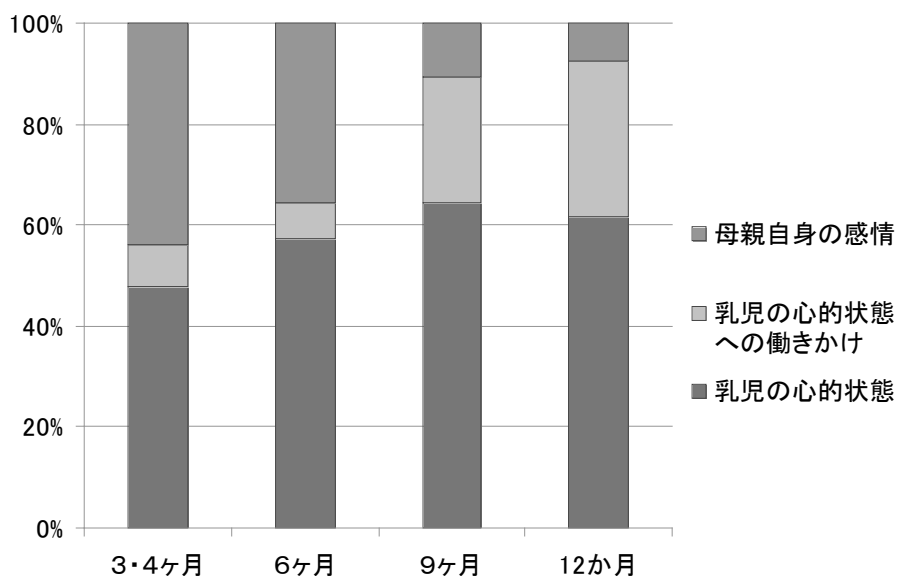


図1 母親が育てる子どもの月齢ごとの各カテゴリーの頻度と割合

【乳児の心的状態】については、母親が育てる子どもが3(4)ヶ月の時点では48%の回答において、母親が自身のかかわりと関連付けて回答していた。子どもの月齢が高くなるにつれて、母親自身が把握した乳児の心的状態を基にかかわりを決めたという回答数は、57%、64%、62%と穏やかに増加していた。【乳児の心的状態への働きかけ】については、子どもが3ヶ月と6ヶ月の時点では、それぞれ8%と7%の回答でみられていたが、子どもの月齢が高くなった9ヶ月と12か月の時点ではそれぞれ25%と31%の回答数で出現しており、増加していた。【母親自身の感情】については、子どもが3ヶ月と6ヶ月の時点ではそれぞれ44%、36%の回答でみられていたが、子どもの月齢が高くなったそれぞれ9ヶ月と12か月の時点では11%、8%の回答でしかみられなくなっており、減少していた。

## 考 察

母親の主観性の関与が乳児の発達に伴ってどのように変化するのかについて検討を行うために、面接調査を行った。母親が育てる子どもの月齢と面接回答にみられた各カテゴリーの割合と出現頻度の検討から、乳児の月齢が高くなるにつれて、(1) 乳児の心的状態を基にした回答が増加すること、(2) 乳児の心的状態に働きかける意図を含む回答が増加すること、(3) 乳児の状態とは関係なく母親自身の願望や感情からかかわるといふ回答は減少すること、の3点が示された。以上の結果は、仮説1, 2, 3を支持するものであった。

ただし、仮説1については、乳児の心的状態は、3ヶ月の時点で非常に少ない状態から徐々に回答に現れるようになったわけではなかった。子どもが3ヶ月の時点からすでに約50%の回答において出現しており、これは、母親たちの多くが生後一ヶ月齢の乳児にも多くの情動の存在を仮定していたJohnson, Emde, Pannabecker, Sternberg, and Davis (1982)の結果や、他者との相互作用と自分の意図との関連について未発達であると考えられる6ヶ月時点においても母親は乳児の行動に意図を持たせていることを明らかにしたMeadows, Elias and Bain (2000)の結果とも一致するものであった。

乳児の心的状態への働きかけの結果からは、乳児の月齢が高くなるにつれて、母親は、自身が把握した乳児の心的状態に対して何らかの働きかけをするよう意図してかかわり、さらにそれは乳児の月齢とともに増加する傾向にあることが示された。特に、子どもが9ヶ月の時点から回答数が増加し、12カ月の時点でも増加していた。具体的には、「一緒にやったらもっと楽しいって思ってくれるかなって」、「面白いところを見せたらもっと興味をもつかなと」、「一生懸命に遊んでるから邪魔したくないから(乳児の興味が続くように尊重する)」といった回答がみられるようになった。母親自身の感情の結果からは、子どもの心的状態に対して働きかける意図が回答に現れてくるのと同じく6ヶ月と9ヶ月の間を境にして変化がみられた。つまり、9ヶ月以降では、子どもの心的状態を基にせず、母親の願望がかかわりにおいて優先されていた回答の割合は減少していた。

これらの結果からは、子どもの心的状態の発達にともなって母親のかかわりの背後に働く主観性の内容が変化していくことが示唆されたといえるだろう。

ではなぜ母親の主観性の内容が、子どもの月齢発達にともなって変化したのだろうか。研究2では、研究1で考察した母親の主観性の変化について、研究1の量的検討の結果の典型的なプロトコルであった表2からID5の1事例の面接記録を用いて質的検討を行う。これは、子どもの月齢が高くなるにつれて、乳児の心的状態の出現頻度には変化がないにも関わらず、母親自身の主観性のうちで乳児の心的状態を意図した回答が9ヶ月を境に出現し、反対に母親自身の感情がみられなくなった事例である。

### 研究2 母親の主観性の変化と乳児の発達の関係

## 目 的

研究2の目的は、研究1で明らかになった母親の主観性の内容的変化が、乳児の発達とどのように関係しているのかについて詳細に検討することである。具体的には、1事例の面接記録を詳細に検討することを通して、子どもの発達にともなって母親の主観性が質的に変化する様相を考察し、質的に検討を行った。

## 方 法

**対象者** 第一子を子育て中の20代後半の母親であった。子どもの性別は男児であり、調査時点での子どもの月齢は、4ヶ月、6ヶ月、9ヶ月、12ヶ月のそれぞれ第三週目であった。

**面接所見の質的分析** 研究1で得られた面接記録を基に、ID5の母親の面接記録を逐語記録に起こした。次に、上嶋(2009)にならってカテゴリーの該当箇所に印をつけて検討を行った。印には、【乳児の心的状態】に該当する部分には実線    を、【乳児の心的状態への働きかけ】に該当する部分には**太字のフォント**を、【母親自身の感情】に該当する部分には*斜体のフォント*を使用した。

## 結果と考察

該当する箇所に印を加えた面接の逐語記録を表3に示した。表3の実線の下線部分にみられるように、乳児の心的状態に関する言及は調査時期、つまり子どもの発達に関わらず面接の回答に出現していた。それにも関わらず、母親の主観性が回答に現れていた部分の詳細をみると、3ヶ月と6ヶ月の回答では、把握された乳児の心的状態に働きかけるような内容には言及されていなかった。一方で、乳児の心的状態が把握されている部分の前後からは、乳児の心的状態が明瞭に把握されなかった場合には、「赤ちゃんが何も動いていないので、どうしたのだろうという思いが私にあって」、反応を引き出すようにかかわろうとしたかかわりのあり方や、乳児の状態に関連してというよりも「長時間放ったらかしにした」ので「(私が)遊んであげたくなる」、「自分も(家事など)他のことしたいな」といった母親本位なかかわりのあり方がうかがえた。

子どもが9ヶ月の時点になると、乳児の心的状態である「寂しかったりするのかな」に対して「なだめてあげよう」、眠気に対して「寝られるようにしてあげよう」というように、母親に感じ取られた乳児の心的状態に対して働きかける意図が回答にみとめられるようになった。また、12か月の時点では、母親が把握した乳児の楽しさや興味に対して、「こっち(私)から何かするというよりも、好きなように」、「やりたいように」乳児がむけている注意や興味を継続できるよう、乳児の心的状態を尊重する内容の意図も回答に求められるようになっていた。

このように、乳児の月齢が高くなるにつれて母親主体の感情や願望が回答に現れなくなり、反対に乳児の心的状態を満たしたり調整したりといった働きかけの意図が回答に出現するようになったという変化は、乳児の月齢が9ヶ月の時点を境にしている。そのため、以下では乳児の心的状態の発達と併せて考察を行う。



表3 かかわりを振り返った際に言及された主なカテゴリーと言及箇所

調査時点	ビデオ クリップ	面接所見
4ヶ月	1	<p>&lt;質問1&gt; <u>気持ちよさそうなので、しゃべりかけてあげて、楽しんでる間は何回か繰り返しやってあげますね。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>赤ちゃんがずっとお母さんの方を見て、声を出して笑ってるので、楽しんでる感じですよ。</u></p> <p>&lt;質問1&gt; <u>一人で遊んでる感じなので、上のおもちゃが気になったり、指しゃぶりしてるので、自分が暇だったら声かけたりしてるかもしれないですけど、(今の状態なら)放ったらかしにしますね。何見てるの？お手手おいしいの？」とか話しておく。</u></p>
	2	<p>&lt;質問2&gt; <u>長時間ぼったらかしにしたら遊んであげたくなる。</u></p>
	3	<p>&lt;質問1&gt; <u>抱っこしてあげる。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>放っておかれるのが嫌なのかと思うので。</u></p>
	4	<p>&lt;質問1&gt; <u>「楽しいねー」「ピエロさんだよ～」ってそれが何かを教えてあげたりとか、動かしてあげたりとか、動くのに音つけてみたりとか。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>赤ちゃんがおもちゃをじっと見て、不思議そうにして見て、興味を持ってる感じがするので。</u></p>
	5	<p>&lt;質問1&gt; <u>赤ちゃんが何も動いていないので、どうしたんだろうって自分の思いがあるので、赤ちゃんの足とかこころやっ触ってみたりとか、どうしたの？とか聞いてみたりとかしますね。赤ちゃんが反応するよう</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>赤ちゃんの表情がなくてつまなさそうにしてるし、興味を引くものを与えてみようと思って。</u></p>
6ヶ月	1	<p>&lt;質問1&gt; <u>近くにいるほっとく。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>一人で遊んでるから、振り回すのが楽しそうにしてるし。</u></p>
	2	<p>&lt;質問1&gt; <u>「お歌歌ってるの？」「気持ちいいねー」って声かける。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>こっち向いてお話ししてるので、相槌をうってあげよう。</u></p> <p>&lt;質問1&gt; <u>「疲れたの」「どうしたのー？」という様子を見て、(うつ伏せから仰向けに)ひっくり返したりかまってあげる。</u></p>
	3	<p>&lt;質問2&gt; <u>頭が重そうに見える。泣きそうになってるところ。前に進もうとせず身動き取れないのかなと。動けなさそうなのと、呼んでる泣き声から。</u></p>
	4	<p>&lt;質問1&gt; <u>一人で遊んでるのでおいとく。近くで家事やりながら。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>どこか行きそうにもないし、周りに危険もないし、一人でハンカチもって遊んでくれるから、自分も他のことしたいな一って思う。</u></p>
	5	<p>&lt;質問1&gt; <u>前に行って「おいで」って音を出してあげたりしてかまってあげる。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>赤ちゃんが固まって困っているの。動けないでいるので、きっかけを与えてあげる。</u></p>
9ヶ月	1	<p>&lt;質問1&gt; <u>「上手上手、いい音するねー」って声かけて、一緒に同じことをして遊んであげます。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>こつちをじーっと見て、できるようになったのがうれしくて何回もやってる感じなので、一緒に何回もやっあげます。</u></p>
	2	<p>&lt;質問1&gt; <u>周りにいろんなものを散らかして、楽しそうにしてるので、一人で遊ばせておきます。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>周りにいろいろなものを散らかして楽しそうにしてるので。お母さんのことが気になる時は(お母さんのところへ)行けるくらいなのに一人で遊んでるとことは一人でいいのかなと。</u></p>
	3	<p>&lt;質問1&gt; <u>お菓子を渡してもこんなにエンエンと泣いてるので、抱っこしてなだめてあげます。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>お腹すいてるならお菓子で大丈夫なはずなので、さみしかったりするのかなって思って抱っこしてなだめるようにしてあげます。</u></p>
	4	<p>&lt;質問1&gt; <u>眠いかな、うとうとする感じがしますね。抱っこして寝かせてあげるかな。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>眠いかな、抱っこして寝れるように(寝か)してあげます。目がうとうとする感じで周りにおもちゃがあるのに興味を示していないので、もう飽きて寝ようとしているところなのかな一つ。</u></p>
	5	<p>&lt;質問1&gt; <u>「ヒモが気になるの？おいしいね！」って「好きだねー」って話しかけてあげます。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>この子が変なことやってるので。</u></p>
12ヶ月	1	<p>&lt;質問1&gt; <u>ボールで遊んであげたりとか。ご機嫌そうだなって。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>すごいご機嫌そうで、笑顔を振りまいていたので。(一般的に、私の場合は)こつち(私)から何かするっていうよりも、(尊重して)好きなようにさせてあげようって。</u></p>
	2	<p>&lt;質問1&gt; <u>寝起きでキョロキョロ探してる感じがするので「こつちだよー」っていつてあげる。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>まだ寝ぼけてそうなのと、どっちに行こうかなと迷ってそうなのと。</u></p>
	3	<p>&lt;質問1&gt; <u>なんか泣き叫んでるので、とりあえず「どうしたの？」とか話しかけてあげる。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>(赤ちゃんが)手で何かを探してそうしてるってのもあるし、(私が)近くまで行って抱っこしてほしかったら(赤ちゃんが)来ると思うからそうしたら抱っこしてあげる。</u></p>
	4	<p>&lt;質問1&gt; <u>やりたいようにやらせてあげるかな。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>食べたかったら食べるんだろうし、本当にただ触って(遊んでい)るのなら取り上げたら泣くだろうし。</u></p>
	5	<p>&lt;質問1&gt; <u>一人で一生懸命遊んでるので、この間に他の家事でもしとこうかなと。</u></p> <p>&lt;質問2&gt; <u>周りに危ないものもないし、一人で一生懸命遊んでるので、それをやらせてあげようかなと。</u></p>

乳児の発達段階の中で、乳児が9ヶ月になると感情や動機、意図などの主観的世界が出現するとされている (Stern, 1985)。また、同時期には、乳児が意図をもった相手として母親を認識してそれに応じた行動をとるようになること (Tomasello, 1993 ; Trevarthen & Hubley, 1978) が知られている。乳児が母親の意図を認識できるようになるということは、母親にとっては自身の意図を乳児が認識してくれるようになることを意味する。このような乳児の発達の变化により、母親は、乳児の意図や感情に対して働きかけることが可能になることにもつながると考えられる。そのため、子どもが9ヶ月になると、乳児の心的状態へ働きかけることが効果的であるという手ごたえが母親に得られるようになったのではないだろうか。これは、事例でとりあげた母親の回答からもみとめられている。つまり、事例の母親の回答からは、子どもが集中している際に介入することは、泣きにつながる、すなわち子どもの心的状態が不快になることを予期していたことがうかがえるからである。そのため、乳児の心的状態を尊重するという意図が喚起されたのだと考えられた。また、研究1で紹介した「もっと興味を持つかな」「もっと楽しくなるかな」といった回答も、母親に、自身の主観性を関与させたかわりか、乳児の心的状態に影響を与えることができるという実感が持てるようになってこそ回答された内容であると考えられる。

母親自身の感情への言及が、9ヶ月を境に減少したという結果についても、上記と同様の理由が考えられる。乳児が、母親を意図をもった相手として認識できるようになることで、母親自身にとっても子どもの心的世界が相互交渉可能なものとなるだろう。そのため、母親のかわりか、自分自身の「(私が子どもに) 笑ってほしいから」「私が触れていたいから」といった母親自身の願望やコントロール意図から受ける影響が小さくなったのだと考えられる。

以上より、母親の主観性の関与のありようが子どもの発達にもなって変化していくことが示された。また、子どもの発達の变化としては、主観的世界の出現や相手を意図するといった社会認知発達が重要であることが示唆された。これらの結果は、母親と乳児期の子どもとの相互作用において、子どもの状態の読み取りを促すのみでなく、母親自身の主観性のありようからも介入の可能性を示したという点で重要な結果であろう。

## 総合考察

本研究では、乳児の発達の变化にもなって、母親の主観性の関与のありようがどのように変化するのかについて面接調査から検討を行った。そして、乳児が9ヶ月になり、心的世界の相互交渉ができるようになると、母親のかわりかは母親自身の内面にある子どもに対する願望から受ける影響は小さくなり、母親に把握された子どもの気持ちを基に、あるいは子どもの気持ちを調整するように働きかけながらかわっていく可能性が示唆された。

本研究では、9ヶ月での発達の变化を中心に考察を行ったが、個々の母親にとっては子どもの心的状態が発達することや把握しやすくなること、子どもの心的状態との相互交渉が持てるようになることが、母親自身の主観性の関与の在り方の変化のきっかけになると考えられる。子どもの側に発達の偏りがあり、言葉の遅れや情動面の発達の遅れなどから子どもが自身の心的状態のありようを伝える

力が弱い場合には、母親にとって子どもの行動の背後の意図や気持ちを把握することは難しくなるだろう。また、子どもが他者の意図を認識することが難しい場合には、母親は子どもの心的状態に働きかける手ごたえを得ることが難しくなるだろう。そのような場合に、母親は何をもとに子どもにかかわっているのだろうか、あるいは母親のかかわりの背景にはどのような主観性が関与しているのだろうか。これらについて検討していくことが今後の課題である。

乳児期は、言葉を用いないコミュニケーションが主であり、心的状態は未分化で曖昧な状態から徐々に分化し明瞭に把握されるようになる時期である。このような点で発達に偏りのある幼児期の子どもと通じる点があり、乳児期の子どもの発達と母親のかかわりに対する母親の主観性の関与を丁寧に検討していくことは、子ども側の要因によってかかわりにくさをもつ母親にとって介入の手だてにつながることができると考えられる。

子どもが自分の足で歩き、言葉を発するようになるまでの生後1年目は、コミュニケーションの難しさを抱えつつも、親と子が関係を育むという大切な時期である。子ども側の心的状態のみでなく、母親の主観性にも目を向けることで、個々の親子の相互作用をよりダイナミックに捉え、適切な見立てと介入を行うことが必要である。

## 引用文献

Emde, R. N. & Sorce, J. F. (1983). The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In Coll, J. D, Galenson, E, & Tyson, R. L. (Eds.), *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books.

(小此木啓吾 (監訳) (1988). 乳幼児からの報酬：情緒応答性と母親参照機能 乳幼児精神医学 東京：岩崎学術出版社 pp. 35-48)

Johnson, W. F., Emde, R.N., Pannabecker, B.J., Sternberg, C.R., & Davis, M.H. (1982). maternal perception of infant emotion from birth through 18 months. *Infant Behavior & Development*, 5, 313-322.

厚生労働省, 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について (第5次報告) の概要, <http://www.mhlw.go.jp/za/0728/c54/c54.html>, 2009年7月

鯨岡峻 (1986). 母子関係の間主観性の問題. *心理学評論*. 29, 506-529.

鯨岡峻 (1989). 母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達. 東京, ミネルヴァ書房.

Meadows, D., Elias, G. & Bain, J. (2000). Mothers' ability to identify infants' communicative acts consistently. *Journal of Child Language*, 27, 393-406.

島義弘, 小原倫子, 小林邦江, 上嶋菜摘. (2009). 乳児の情動状態の読み取りに関する研究—VTR刺激の開発と妥当性の検討—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要.

Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant*. New York: Basic Books. (小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989). 乳児の対人世界—理論編 岩崎学術出版

社)

Tomasello, M, (1993). The interpersonal origins of self-concept. In U. Neisser (Ed.), The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge (pp174-184). Cambridge: Cambridge University Press.

Trevarthen, C., & Hubley, P. (1978). Secondary Intersubjectivity: Confidence, confiding, and acts of meaning in the first year. In A. Lock (Ed.), Action, gesture, and symbol (pp.183-229). London: Academic Press.

上嶋菜摘 (2008). 乳児とのかかわりにおいて母親が用いる手がかりの検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科修士論文 (未公刊).

上嶋菜摘 (2009). 乳児に対する母親のかかわりに影響を及ぼす要因—乳児の月齢を考慮した探索的検討—. 発達研究, 23, 209-214.

上嶋菜摘 (2009). 母親の主観性を捉える試み—共通のビデオクリップを使用した実験的方法の妥当性—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要.

## 謝 辞

調査にご協力くださいましたお母さんとお子さんに記して感謝申し上げます。また、日ごろの研究を進めるにあたり、動機づけを高めてくださった研究会のメンバーにも感謝申し上げます。

脚注1) 子どもを育てる養育者は母親だけではないが、本研究では主たる養育者として母親という表記に統一している。

脚注2) 乳児の内的状態という用語を乳児の心的状態と呼ぶことにした。